

## 小児アデノウイルス感染症の臨床的検討

にし の やす お  
西 野 泰 生

キーワード：急性熱性疾患，アデノウイルス，発熱，白血球数，好中球%，CRP

### 要 旨

1990～1999年の当院外来における熱性疾患についてアデノウイルス，インフルエンザ，エンテロウイルス，溶連菌を対象に検索し2,481株を検出した。病原的にはエンテロウイルスが55.7%を占め，アデノウイルスは11.5% (287件) で最少であった。アデノウイルスの発生は通年性にみられ，平均発症年齢は2.8歳，0～6歳が90%を占めた。発生は通常3型優位であるが，1990年代の当院，島根県では2型優位であり，全国集計とは異なった発生パターンであった。感染像は1，2，4，5型は60～80%が咽頭炎型であったが，3型は咽頭結膜熱が41%と高率であった。また胃腸炎型も10～20%にみられた。臨床症状は発熱度，有熱日数とも，他の病原より顕著であったが，統計的有意差はなかった。白血球数は15,000/ $\mu$ l以上が58.3%を占め，平均白血球数も16,111/ $\mu$ lであり，他の病原に比し有意に高値であった。しかしCRP定性陽性率，定量値ともウイルス性疾患では差がなかったが，溶連菌に比較すると有意に低率であり鑑別上有用と思われた。

アデノウイルス感染症は炎症反応が強く，細菌性疾患との鑑別困難な症例も多く経験される。しかし，臨床所見の十分な検討によって診断率は向上し，抗菌薬の過剰投与も避けられると考えている。

### はじめに

小児の急性熱性疾患は外来診療の中心的疾病であるが，病原的にはウイルスが主であり，これに溶連菌などの細菌感染が加わって疾病群をなしている。このうちアデノウイルスは他のウイルスに

比し炎症反応が強く，細菌性疾患との鑑別面でも重要なウイルスである。今回は他病原による熱性疾患と比較しながらアデノウイルスの発生状況，病像を検討したので報告する。

### I. 対象および検索方法

1990～1999年に分離されたアデノウイルス症例をエンテロウイルス，インフルエンザ，溶連菌と比較し疫学的検討を行った。同時にウイルス分離